
シルバーマンジムのバスケット・オリバ
咲さん

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルバーマンジムのビスケット・オリバ

【作者名】

咲さん

【あらすじ】

死刑囚の確保を依頼されたビスケット・オリバはトレーニング場所にシルバーマンジムを選んだ。交わるはずの無い組み合わせの人間が交わった時、何が起ころのか？

pixiv にも投稿してます

始動するバスケット・オリバ

「バスケット・オリバ」はキューバ系アメリカ人でアリゾナ州立刑務所に収監されている囚人である。そんな彼が何故日本にいるのか？それは刑務所内での特殊な立場によるものだった。

「ミスター・アンチェイン（繋がれざる者）」と呼ばれる彼には刑務所を自由に出入りできる権利が認められている。犯罪者を捕獲する能力に長け、その功績と能力を見込まれ刑務所での刑罰と拘束を免れていた。彼を閉じ込めておける部屋も戦力も無いという理由もあるが。

そんな彼は日本での仕事の合間に通えるジムを探していた。

「ここにするか」

「シルバーマンジム」は世界的に有名なジムで会員数も多くトレーニング器具も充実した国内最大手のジムである。ここならばある程度満足出来るトレーニングも出来るだろう。と足を踏み入れた。

街雄鳴造はアメリカへの留学を経てスポーツ理論を学びトレーナーとしてもボディビルダーとしても一流の人間である。そんな彼だからこそ目の前の人物の肉体に驚きを隠せずにいる。

身長は180cmを少し超えた程度であろうか。シルバーマンジムではボディビルダーやプロ格闘家が多く在籍している為、平均的な

身長と言える。問題はその筋肉にあった。

（大胸筋がまるで臀部のようだ：上腕筋が頭よりデカイ。ここまで発達した筋肉は見たことがない：一体どんなトレーニングをすればここまでの厚さに？）

驚きつつもトレーナーとしての仕事をする為に声を掛ける。

「こんにちは！シルバーマンジムのトレーナーの街雄です。ビスケットオリバさんはトレーニング経験者ですか？」

「仕事柄体力が必要でな。人並みにはしてるぜ。」

どう考えても人並みのトレーニングで付くような筋肉ではないと考えつつも、質問を重ねていく。

「普段はどのようなトレーニングをしていますか？」

「へりと引っ張り合っている」

冗談で言っているのだろうと笑いながら、そろそろトレーニングを始めようかと意識を切り替える。

「まずはベンチプレスから始めてみましょうか！何キロから始めますか？」

「600で良い」

耳を疑う。また冗談だろうかと顔を見るが顔は笑っておらず、本気で言っているのだと分かってしまった。

現在ベンチプレスの世界記録が500kgであり、その記録でさえ科学的に不可能と言われていた記録である。それに加えて更に100kgも上乘せして上げるなどスポーツ理論を学んでいた街雄としてはタチの悪い冗談としか思えなかった。トレーニング中の事故の防止はトレーナーの大事な仕事である。許可出来ない、と言おうとした所でビスケットオリバの肉体が改めて目に入る。

（何故だろう：彼なら軽々と上げてしまうような気がする…）
街雄自身人並み外れた肉体を持っているが、その筋肉からは未だ感じた事のない言葉で表せぬオーラや凄味を感じた。

「分かりました。チャレンジしてみましよう。」

重量が重量なだけにベンチプレスの補助は3人で行う事になり、手の空いているトレーナーを呼び補助を手伝ってもらおう。下手をすれば怪我をするだけでなく命に関わる可能性もあり、自然と緊張感が高まっていく。まるで大会前の様な緊迫した雰囲気周りの注目も集まり、人垣が出来てきた。

「何してるんだ？」 「ベンチプレスだよ」 「記録でも取るのか？」
「凄え筋肉だなァ」

そんな人垣の中に奏流院朱美もいた。

奏流院朱美は重度の筋肉フェチである。ボディビル大会を巡り様々な筋肉を見てきた。そんな彼女からしてもビスケット・オリバの筋肉は理解不能であった。

（彼は一体何者なの…？）

一目見た瞬間から感じたイメージ。まるで何十メートルもの筋肉の塊が無理矢理人の形に収められたかのような映像を幻視した。

「準備が出来ました」

その言葉で思考を中断し、これから起こる事を全て目に焼き付けんと意識を切り替え見た光景は

「フンッ」

そんな特に力を入れた様子がない気合の入れ方で600kgもの重量を軽々と持ち上げるビスケット・オリバの姿であった。

街雄達トレーナー含め周りの野次馬は驚きで言葉を発する事が出来ずに固まる。

そんな反応を気にすること事もなくビスケットオリバが行ったのは更に二回目を行う事であった。

確かにベンチプレスを手レーニングとして行うならば2回目3回目と続けるのは当たり前前の事である。

しかし世界記録を軽々と超えた重量を手レーニングとして使うというのは想像も出来ず、一度で終わりだと思いついていた面々は言葉を失う。

そうして時間が経ち100回を区切りに小休止に入るビスケットオリバ。未だにギャラリイは晴れることはなかった。

「次はスクワットでもやるか」

その一言で周りが色めき立つ。周りの期待を受けスクワットを始めようとしたその瞬間、彼の携帯電話の呼び出し音が鳴り響いた。

「悪いな街雄サン。仕事が入っちゃった。」

そう言いシャワー室に向かうビスケットオリバを見送りながら街雄は思う。今日の驚きを、感動を忘れることは無いだろうと。

こうして謎の怪力無双ビスケット・オリバはシルバーマンジムで伝説となるのであった。

尚、トレーニング風景を撮影していたジム会員によって流失した映像が主にネットで拡散され、大きな話題になったとか。

ビスケット・オリバ 各所の反応

【怪力】話題の600キロベンチプレスの黒人について語るスレ1

【無双】

1. 名無しのマッチョさん

ここは謎の黒人の筋トレ動画について語る場所です。

荒らしはNG。

2. 名無しのマッチョさん

乙

3. 名無しのマッチョさん

√√1 乙

4. 名無しのマッチョさん

動画見たけどCGかなんかだろ

5. 名無しのマッチョさん

凄い筋肉してんな

6. 名無しのマッチョさん

√√4 重量軽くしてあるんじゃないかね？見た目同じで軽いやつ作って
さ

7. 名無しのマッチョさん

黒人も凄いけど補助の人も凄い筋肉やな

8・名無しのマッチョさん

でもこの筋肉なら600上げてても違和感ないな

9・名無しのマッチョさん

^^6 現場にいたけどガチの重量だったぞ

10・名無しのマッチョさん

ていうかこの補助の人どっかで見たことあるな

11・名無しのマッチョさん

いや普通に考えて100回も出来るわけないだろ。トリックがあるはず

12・名無しのマッチョさん

^^8 お前ベンチプレスニワカか？筋肉が足りても骨が耐えられないんだよ。科学的に500キロが骨の耐えられる限界点

13・名無しのマッチョさん

てかこのトレーナーの人コミケのリアル筋王じゃね？

14・名無しのマッチョさん

この黒人、こないだ警察と一緒に何かやってんの見たわ

15・名無しのマッチョさん

√√13 どっかで見たことあると思ったらそれか

16・名無しのマッチョさん

√√14 警察関係者なのかね

17・名無しのマッチョさん

シルバーマンジム 近場だし直接行って話聞いてくるわ

18・名無しのマッチョさん

そもそも表に出てないのは何故だ？600上げられるヤツが完全な無名なのはおかしいだろ。だからフェイク動画

19・名無しのマッチョさん

√√18 鍛えてるヤツが全員表に出てくる訳ではないだろ

20・名無しのマッチョさん

√√17 俺も兄貴がシルバーマンジムの関係者だから話聞いてみる

21・名無しのマッチョさん

謎の黒人じゃアレだし呼び方考えるか

22・名無しのマッチョさん

ボブサップで

23・名無しのマッチョさん

凄いのが身長がかなりあるのに上げてる所。腕も長いからかなり不利なのに

24・名無しのマッチョさん
ロニーコールマン

25・名無しのマッチョさん
ディグダ

26・名無しのマッチョさん
セルジオ・オリバで

27・名無しのマッチョさん
ていうか元動画も貼らずにスレ立てとか

28・名無しのマッチョさん
▽▽25 ディグダはやめて差し上げろ

29・名無しのマッチョさん
動画見てきたけど、マッチョ見ながらアへ顔晒してる女が滅茶苦茶
可愛い

30・名無しのマッチョさん
▽▽26 偽オリバでええやん

31・名無しのマッチョさん
ていうかボディビルダー今すぐにもデビューできそうならい筋
肉あるよな。ドーピングしてそう

32・名無しのトレーナーさん

現場で補助してたトレーナーです。用意したので断言できます。あれは間違いなく600kgありましたよ。それをあんな軽々と上げるなんて今でも信じられません

33・名無しのマッチョさん

▽▽32 そもそもなんであんな重量でベンチプレスやる事になったの？

34・名無しのマッチョさん

▽▽32 当事者が来てくれたからやっと議論が進むな

35・名無しのトレーナーさん

▽33 私は担当してなかったので直接は知りませんが、担当した同僚に話を聞いた所、本人がその重量でやりたがったらしいです。

36・名無しのマッチョさん

名前とか何か言ってなかった？

37・名無しのマッチョさん

そもそも外国人っぽいけど日本住みなのかね？

38・名無しのトレーナーさん

▽▽36 名前は分かっていますが、プライバシーがあるのでちょっと言えません

▽▽37 仕事で日本に来てたらしいです

39・名無しのマッチョさん

まあ、名前言えないのはしょうがないな。なんの仕事してるんやろ

40・名無しのマッチョさん

あれからジムには来てるんか？

41・名無しのトレーナーさん

▽▽39 仕事柄鍛えてるって言ってたらしいので肉体を使う仕事だと思っています

▽▽40 度々来てますね。あの時のベンチプレス全力じゃなくてまだまだ重量上げられるって言ってました。冗談か本気かはわかりませんが

42・名無しのマッチョさん

▽▽41 あれでまだ余力あるとか人間じゃないだろ

43・名無しのトレーナーさん

▽▽42 実際に見てみれば分かりますが人間離れしてますよ。言い方は悪いですが化け物ですよアレは。

44・名無しのマッチョさん

▽▽41 今更だけど日本語は話せてたの？日本で仕事やるぐらいだからカタコトレベルには話せてそうだけど

45・名無しのトレーナーさん

▽▽44 かなり上手でしたよ。話していて違和感がないぐらい上手かったです

46・名無しのマッチョさん

纏めると

- ・警察と一緒に仕事をしに日本に来た
 - ・肉体を使う仕事
 - ・不正がないとしたら魅せ筋じゃなく超怪力
 - ・トップレベルのボディビルダー並みの肉体美
 - ・高い日本語能力
- うくむ。更に分からなくなってきた

(このあとも雑談は続く)

35歳 会社員

「一目見た時から只者ではないと思っていました」

「え？どうしてそう思ったか、ですか？こう：漂うオーラというか
：見ただけで自分達とは違うレベルの生き物なんだなって感じましたね。」

「体重200がキロ近くあるのに体脂肪率が5%を切ってるらしいですよ。鋼の肉体ってのはああいうのをいうんだなって思います」

42歳 料理人

「ああ、来てた来てた。」

「目の前がジムだからね。筋肉質な客は多いけど彼は別格だったね。」

「50人前は食べてたよ。消費カロリーが普通の人と違うんだろうねえ。やっぱり」

17歳女子高生

「アレは凄かったわね。」

「何をしたか？」

「力瘤が移動を始めて：肩、頭の後ろ、反対側の腕の先へ：力を入れる場所を変えてるんでしょね。それを同時数カ所でやるなんて神業よ神業！」

25歳トレーナー

「トレーナーとして彼についてどう思うかですか？」

「彼の凄いところは、あれだけの筋肉を付けたら普通は動きが鈍くなくてあまり素早く動けなくなる筈なんです。」

「彼はとにかく身軽なんですよ。ランニングマシンでのトレーニ

ングを行ったことがあるんですが時速20kmのスピードで30分
近く走っていたんですよ」

「あの体重でその持久力と素早さはまさしく人間離れ、としか言え
ません」

紗倉ひびきとビスケットオリバ

紗倉ひびきは皇桜女学院に通う今をときめく女子高生である。食べ歩きが趣味な彼女は買い食いの資金を稼ぐべく兄の開業した焼肉屋でアルバイトに勤しんでいた。

「ひびき！6番テーブルにカルビ10人前！」

「はい。」

（6番テーブルの人よく食べるなあ。しかしあの人どっかで見たことあるんだよなあ…）

お昼時も過ぎ、客もほぼいなくなったが一人の客の為に厨房は休む暇もなく稼働していた。己もよく食べる方だと自覚しているがこの客は常軌を逸している。

「カルビ10人前、お待ち！」

（うわぁ…すごい筋肉だなあ。街雄さんレベルの筋肉…ん？筋肉？）

「あっ、思い出した！」

「？」

「お客さんの名前、ビスケットオリバさんじゃありませんか！？」

「そうだが：わたしを知っているのかね？」

「同じジムでトレーニングをしてる紗倉ひびきって言います！前からトレーニングしてる姿を見かけてました！」

なるほど、と頷くオリバを見ながら思い出した。

「あっ、そろそろ賄いの時間なので失礼します！」

そう言い、取りに行こうとした瞬間声が掛かる。

「それなら一緒にどうかね？今ちようど話し相手が欲しい気分だね」

「何、子供が遠慮をするもんじゃない。奢るからたらふく食べな」

断るのも失礼だと思い私はその言葉に甘える事にした。

少し長く休憩する事になる為、兄である店長にその事を伝えようと、賄い代が浮くばかりでなく売上になるのでドンドン食べて来いと逆に喜ばれた。

笑顔で肉を焼くひびきを見ながらビスケット・オリバは考える。

（不思議な娘だ）

恋人であるマリアを除き、皆が自分を見る時には

一般人ならば恐怖心を、闘技者であれば敵対心を抱いた目で見られ

る事が多い。自分からそう仕向けてるフシがあるのでしょうがないと割り切っているのだがこの佐倉ひびきという少女からは純粋な尊敬と好奇心を感じていた。

今は気分が良い。その好奇心を満たしてやろう。

「わたしに聞きたいことがあるんじゃないかね？顔に出てるぜ」

「えっ、出てましたか!?」

「君は分かり易い性格をしているな。さっきも遠慮するなど言っただろう。何でも聞きな」

「えっと…それじゃあ…」

悩んでいた様だが決心がついたのか口を開く。

「オリバさんはどうしてそんなに鍛えてるんですか？

恐らく気になった事をそのまま口に出しているのだろう。本当に素直な娘だ。

「わたしにはマリアという恋人がいるんだが、マリアは病を患っていてね…彼女を抱き抱える為に鍛えたのだよ」

「へえ〜！彼女さん想いなんですね！」

「毎度毎度、怒られてばかりだがね」

「それだけオリバさんの事を信頼してるんだと思います！自分の為にそこまで頑張ってくれる彼氏さんがいるなんて羨ましいです！私も彼氏欲しいなあ〜」

病の事について触れずに明るい雰囲気切り替えるひびき。気を遣わせてしまった、と反省しながら話を続ける。

「それならわたしからひとつアドバイスをしよう。イイ男ってのは外見より内面をよく見るものだ。君と話しているととても心地が良い。その内良い男が必ず見つかる」

「だが、それでも不安なら努力を怠らぬ事だ。努力をし続けている姿はそれだけで魅力的に映るものさ」

努力かぁ…と呟くひびき。それを見ながら思う。

話していて飽きない娘だ。彼女ならばマリアも気に入るだろう。

何かを悩むようにしていたひびきがやがて意を決したように話し始めた。

「あの…聞いてくれますか？私には夢があるんです」

この人ならば茶化さず真剣に相談を聞いてくれる。そう思った。

「夢…か。話してみなさい」

「シルバーマンジムに街雄さんっていうトレーナーがいるんですが、待雄さんを見ている内に私もこんな仕事をしたって憧れるようになったんです。」

「ふむ…続けてみなさい」

「はい。その為にはアメリカに留学して勉強をしなければなりません。けど私は頭が良くありません。やっぱり私には無理なんじゃないでしょうか？」

「ステイツはわたしの庭だ…：ハーバードであろうとどこだろうとわたしが一声かければ1人や2人足し算すら出来ずとも入学させられるだろう。」

その言葉にギョツとする。只者ではないとは思っていたが、予想以上の権力を持っているようだ。

「わたしは君を気に入っている。力を貸すのも吝かではない。だが君はわたしの力で他人を蹴落として叶えた夢に誇りを持つ事は出来ないだろう？」

「当たり前です！」

そう言うひびきを満足そうに見ながらビスケット・オリバは言葉を続けた

「ならばやる事は分かっているはずだ。毎日勉強も頑張りなさい。努力をし続ければ君の夢はきっと叶う。」

「受かったら電話しなさい。ステイツデビューの歓迎を盛大にしよ

うじゃないか。」

何か困った事があったら気軽に電話を寄越しなさい。と言いながら立ち去っていくビスケット・オリバにひびきは声を掛けた。

「あの…オリバさんっ！相談乗ってもらってありがとうございまして！」

ひびきの表情は憑き物が落ちたような、決意に満ちた表情をしていた。

そんなひびきの顔を満足げに見ながら軽く手を上げ歩き去る。

（良いツラをするようになった…：彼女なら夢を叶えるだろう。）
合格したらどう祝ってやろうか。そんなことを考えながらふと思う。
久しぶりに楽しい時間であった。他愛のない話を打算抜きでする。
それだけの事がこれだけ楽しいとは。

その日は普段以上に恋人に会いたい気分になった。

~~~~~1年と半年後~~~~~

新 擦太郎しんさするたろうはこの道数十年のベテラン入国審査官である。数多くの

入国者の審査をするが、記憶に残る入国者というのはそれなりに出てくる。彼もそんな1人であった。

「ビスケット・オリバさんですね。今回もビジネスですか？」

「いや、今回は違う。嬉しいメールが届いてね。数年越しの約束を果たしに来たのさ」

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~24075](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~24075)

---

シルバーマンジムのバスケット・オリバ  
2019年12月27日 16時44分発行